

こだま

9号

日本基督教団 若松教会

〒808-0053

北九州市若松区修多羅1-8-1

TEL: 093-771-4329

神からの挑戦

茶屋明郎牧師

「彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉おけに寝かせた。」

(ルカによる福音書2章6節～7節)

今から約2,000年前の12月25日、ある若い夫婦が初めての子を産みました。この時の出産は、格別に変でした。

臨月の身であるにもかかわらず、時の権力者によって無理に強制的に、彼らが住んでいる、片田舎のガリラヤ地方のナザレの町から、遠い地であるベツレヘムの町に移動させられていました。

たどり着いた宿屋には、彼らを受け入れ、泊める部屋はなく、しかたなく、馬小屋に泊まらざるを得なくなり、その臭いにおいのする、汚れたみすぼらしい場所で、初子を出産し、貧しい飼い葉おけに寝かせなければなりませんでした。

この出産には、無力さも、卑しさ、貧しさという印象を抱かせるものがあり、なんと悲惨な出産であったことか、この若い夫婦はどんなに心を痛め、つらく心苦しく感じていたことかと思わせるものがあります。

この悲惨さを感じさせる中で生まれた幼な児は、実は、神の子であり、真の偉大さ、真の豊かさ、真の尊さを身につけておられる方であり、待ち望まれた救い主であるというメッセージが示されています。

このメッセージは何を示しているのか、この訴えは何を問いかけ、神からの挑戦はどんなことなのでしょう。

一つは、パウロが述べているように、主は豊かであったのに、私たちのために貧しくなり、主の貧しさによって、私たちを豊かに造り変えるためでした。主の貧しさは、十字架と復活を示し、私たちが生きているのは、赦されて、生かされて生きているのであり、さまざまな恵みのすべては、強さも豊かさも尊さも、すべて与えられて得ているものであるという問いかけがあり、神からの挑戦があります。

もう一つは、真の偉大さ、真の豊かさ、真の尊さが示されているということです。つまり、威張ったり、非難したりすることが強さでも偉大さでもなく、何か多く所有していることが豊かさでもなく、仕えられることが尊いことでもなく、そうではなく、他者のために無力になり、優しくなれることが、真の強さであり、他者のため心から与えることが、真の豊かさであり、他者に身を低くして仕えることが、真に尊く偉大なことであるという問いかけがあり、真でない、偽りの強さ、豊かさ、偉大さに心惹かれる私たちに、そうではないのではないか？という、神からの挑戦があるのかもしれない。



イエスの誕生 池上ルーテル教会より

受洗の喜び

野末育利・信恵（文：育利）

2019年10月20日受洗

このたび私たちは、茶屋牧師のお導きのなか、教会員に見守って頂きながら、受洗の喜びを得ました。今後の信仰への歩みを、親しくお導きいただけますよう、自己紹介と感想を述べさせていただきます。

夫の私は、1940年大阪生まれで、1945年の大阪大空襲で家族7人焼け出され、江津市、光市へと彷徨い、父は1946年に栄養失調で、母は1953年に癌で亡くなりました。

5人兄弟姉妹の最年少の私は、母と二人暮らしから野良犬状態となりましたが、可愛がられる野良犬だったらしく、周囲の人の助けで寮費と学費を稼ぐ道を付けてもらい、これからは工業の時代だからと、工業高校を卒業しました。一目散に職についたのが石炭でドス黒い町、若松の化学会社でした。会社生活は、運良く新設の技術導入会社で、技術を理解しなければならぬと、多数の技術者が親会社から派遣され、私は優秀な化学者の論文作成の助手となって、鍛えてもらいました。そのお蔭で後に研究開発の仕事に就き、楽しい充実した会社生活を送ることができたのでした。

妻の信恵(1939年生)とは、1966年に長い寮生活に飽きた私が、下宿を探して入ったところが、教会員の福山熊記・ツチノ夫妻の家で、その家に月に一度帰ってくる女性が居り、数度目の帰省の夕食で、初めて顔を合わせたのが信恵でした。県立保母養成所(福岡県立大の前身)を経て、門司の保育所に住込みしていること、福山夫妻の妻ツチノは信恵の伯母であること、信恵も帰省したときは教会に行くこと、教会では信恵は、父親で教会員の光安富男に会うこと、など信恵の家族事情を知ることになりました。

私たちは家族に恵まれておらず、二人で家族を作ろうと結婚しました。1968年、尾瀬牧師のお導きで、若松教会で式を挙げました。挙式後、教会員になるにはキリスト教の理解が先か、それとも信仰が先かとお尋ねしましたら、信仰が先との答え、これは難しいぞと思い込み、私の洗礼は棚上げ状態となりました。

信恵は、結婚後数年して、若松乳児保育所の新設で、開所から現場を任せられ、苦勞をしたようです。時代は、女性も外で働くことが強く求められ始めた1970年代、乳児専門の保育実践は、衆目の的となり、1999年の定年離職後は、県立福祉大で講座が設けられ、非常勤講師として勤めました。2003年ごろ、ちょっと小難しい仕事を要請され、このころから体調不良が始まり、現在は私が家事の殆どをこなしている状況です。

私の信仰を誓う生活は、始まったばかりで、聖書を開くも目が彷徨ってしまい、どうしても、大掴みでいいから全体の構図を知りたいと、「一番わかり易いキリスト教入門(図解)」とか、「初めて読む人のための聖書ガイド」を買って求め、珈琲ブレイクには開いています。なんだかグローバルスタンダードの世界に足を踏み入れた感じで、もっと早く読めばよかったと思い始めています。

私たちが受洗の喜びにあるとき、中村 哲 氏の銃撃死の悲報が流れました。医者がいくら頑張っても患者を減らせない問題の根っこに視点を据え、「一隅を照らす」を実践された偉人の死に涙しています。

中村 哲 氏の従兄に当たる玉井史太郎氏を介して、永遠に尊敬できる人を知って、感謝しています。

神がこの出来事を大きな心で包んで下さっているようです。私の受洗は、妻の傍にいる為の思いが、踏み出しのきっかけとなっていますが、心根には信仰心があると思います。



左から、野末育利さん、信恵さん、上野さん



中村哲氏 日本経済新聞より

上野知佳子さんの紹介

茶屋明郎牧師

礼拝に初めて出席されたのは、4年ぐらい前であり、その後は、年に数回しか休まずに、熱心に出席されています。

上野さんが教会に行くきっかけとなったのは、若松コールファンタジーという女性合唱団に属しているほどに、歌うのが大変好きなので、賛美歌が歌えるからということのようです。

これまでの間、なくなられたご主人や、お姉さまの葬儀を教会に依頼してくださるほど、若松教会を喜んで受け入れてくださっていることを感じていました。受洗への期待をして、いつ申し出があるのかと祈っていたところでした。

受洗の試問会の時に、上野さんが述べられた、若松教会の空気感が心地よいという言葉に、すごくうれしく思いました。

礼拝に出席するたびに、小さな、奇麗な花束を持ってこられて、飾ってくださり、礼拝の雰囲気や和んでいます。

これからも良き賜物を生かして、若松教会を支えてくださることを期待しています。



受洗祝会のケーキ

連続爆発事件以後のスリランカで思うこと

松本京子

スリランカでは11月に大統領選挙が行われた。『毎日新聞』は、16日朝刊で投票日であること、18日朝刊では選挙結果を報道した。今回の大統領選には、過去最多の35人が立候補したが、事実上はゴタバヤ・ラジャパクサ氏とサンジット・プレマサダ氏の一騎打ちだった。勝利したラジャパクサ氏は、11月18日からスリランカの大統領である。その後も『毎日』は、スリランカの民族問題特集シリーズや、新大統領の初外遊がインドであったことなどフォロー記事が続いている。

今年2019年4月、カトリック教会や有名ホテルを標的とした連続爆発があり、数百人が負傷し、少なくとも290人が死亡した。これ以降スリランカを訪れる外国人観光客は激減、この事件による経済的打撃は小さくはない。

ホテルの経営幹部の友人は、選挙後「これで観光客が戻ってくれる」と歓迎している。国家公務員の女性は、「どちらが大統領になっても微妙」と言う。私の友人は、インドタミルが多いので、ラジャパクサは絶対ダメ派が多い。

友人たちの発言は、その人の民族・宗教によっている。ラジャパクサ家は、「シンハラ至上主義者」と言われる。スリランカの人口の70%は、シンハラ人仏教徒である。ランカー島は、仏教徒であるシンハラ人のものというのが、過激派仏教徒の主張である。タミル人ヒンドゥー教徒やイスラム教徒の存在を認めようとはしない。彼らのすることは、デモやヘイトスピーチのみならず、家の焼き討ち、寺院の破壊など超暴力的。去年2018年3月には、キャンディの郊外で、仏教徒過激派によるイスラム教徒の村の焼き討ちがあった。その後の暴動を警戒して、「非常事態宣言」が発せられたほどだ。イースターの連続爆破事件後の2019年5月、爆破されたネゴンボの教会近くのイスラム教徒の居住区が焼き討ちされた。タミル人との内戦終結以降、仏教徒の標的はイスラム教徒に向かっている。



左：サンジット・プレマサダ氏
右：ゴタバヤ・ラジャパクサ氏
毎日新聞より

仏教過激派とラジャパクサ家は密接な関係があるので、新大統領が「民族融和に努める」と言っても、少数派の人々は懐疑的である。新大統領は、兄のマヒンダ氏が大統領の時代(2005～2015年)の国防次官であった(11月20日には、この兄を首相に任命している)。新大統領には、内戦中の政府軍によるタミル人民間人への「虐殺」の関与も指摘されてきた。国際社会からの人権侵害のための調査実施も拒み続けてきたが、大統領就任で、それがさらに延期されることが懸念されている。

兄マヒンダ氏は、26年続いた内戦を中国とパキスタンの軍事援助を受けて終結させた。再選のための大統領選では圧勝し、その後強いリーダーシップを発揮してきた。2015年の選挙では、大統領3選禁止条項の撤廃に加え、親族を要職につかせるなど縁故主義的で、独裁的な大規模プロジェクトについても、汚職疑惑が取り沙汰されて敗北し、一度は政界を去った。大統領任期中のインフラストラクチャー資金は、外国からの有償援助で調達されたので、スリランカの国家債務が急増、この債務は完済までに400年もかかるという「債務のワナ」状況である。

そのスリランカを生み出した一家の復権である。シンハラ人仏教徒には、強いリーダーシップの下スリランカの経済成長が続けられる、と希望が持てるだろう。紅茶農園で働くインドタミル人たち、昔からランカー島に住んでいるタミル人たちやイスラム教徒など、少数派にとっては、人権を尊重しない大統領の出現は脅威である。

スリランカはどうなることだろう、と思う。日本の新聞が、スリランカの動向に関心を持つのはなぜか、見守っていききたい。一方、スリランカの状況は他人ごとではない、とも思う。今年元号が平成から令和に変更された。世俗国家でありながら、国費でまかなわれた天皇家の代替わりの数々の行事と大嘗祭。神道と在特会の存在。

宗教はこれまで政治に利用されてきたし、これからも利用され続けるだろう。スリランカの友人たちの不安を共有すると同時に、私たちの国の少数派・在日・外国から働きに来ている人々が、差別や暴力行為の対象になるなど、人権が侵されることのないよう見守っていききたい。

第28回 NO MORE「倭乱」in巨済島・釜山 に参加して

二階堂裕

7月21日から24日3泊4日でNO MORE「倭乱」に参加して来ました。私として、3回目の参加となります。今年は、去年と同じ巨済島での集会ですが、正確には、巨済島西隣の七川島のある漆川海戦公園での開催でした。ここには、「漆川海戦公園展示館」があり、休館日でしたが開けて頂き、中を見る事が出来ました。感謝です。

七川島南側に小さな入江があり、この場所で戦いがあり、朝鮮水軍180隻中150隻以上、1万人以上の戦死者を出した戦跡との話でした。

大敗を帰した事実を歴史に基づいてキッチリ後世に伝える事は、中々難しいとは思いますが、韓国の教育は、歴史を歪曲する事なく伝えているのだなと感心しました。

(何処かの国の場合は、都合の悪い歴史は、理屈をつけて歪曲するか、無かった事にする。)

前後しますが、釜山に着いて最初に向かったのは、日本領事館裏にある「少女像」の見学です。今年は、50mくらい離れた所に、「徴用工」の像も設置してありました。

少女像の所で釜山日報の記者からのインタビューを受け、翌日の新聞に写真付きで掲載されました。

夜の交流会(高校生及び引率の先生)では、高校1年生が4名参加しましたが、いつもと違い、高校に入って3ヶ月しか経っていない子ども達が、しっかり自分の意見を言う事に感心しました。(今年彼女達は、8月6日広島での平和集会に参加するとの事)



漆川海戦公園 ライブドアニュースより

はるか昔、高校二年生の時のこと、冬休み前に国語の先生から、「宿題として、百人一首を全部暗記するように」と言われたことがあった。私達は、思わず「えー」と叫んだが、当の先生は大学出たての若い女の先生で、女子高生に気を張っていたのか、単なる性格か、笑顔を見せない人だった。私達の悲鳴も意に介さず、「冬休み明けにはテストをします」で、押し切られてしまった。

小学生の頃、父から、「一年に、十首ずつ覚えなさい」と言われ、必死で覚えても、次の年には何を覚えたのかも忘れる始末だったが、テストといわれては仕方がない。百首全部と、各々の作者を完璧に覚えて、試験はクリアした。しかし、詰め込みの丸暗記は、若さにまかせて、覚えるのは早い、忘れるのも早い。その上、寄る年波には勝てず、ほとんどの歌は、記憶の片隅に、かけらとして残っているだけになってしまった。しかし、当時から一番好きだった歌は、しっかり記憶に刻まれている。

「秋風にたなびく雲のたえまより
もえいづる月の影のさやけさ」
左京大夫藤原顕輔

百人一首中、三大絶唱の一つと言われているこの歌は、上代のものでありながら、感覚的に現代のものと同じく変わらない美しさがあり、冷たいはずの月の光が、単に広大な宇宙の一部にもかかわらず、神々しくさえ感じられるところが好きなのである。

後年買い求めた百人一首のカルタは、まともに使われることはなく、子や孫の代に、「坊主めぐり」として、活路を見出しただけだった。そして今、三十一文字にこめられた先人の思いに心をはせながら、覚え直すことは、認知症の予防に役立つだろうか、よこしまな思いで思案中である。



東伊豆町観光協会より

元気教会プロジェクト

筒井隆夫

2019年8月31日、元気教会プロジェクトを開催しました。第一部は、大野寿子先生の講演、「夢と笑顔、いのちのものがたり」で、メイク・ア・ウィッシュの活動をご報告いただきました。また、金斗鉦先生の講演、「私から見たヘイトスピーチ」で、現在日本で起こっている、様々な偏見や誤解について、話していただきました。第2部は、平井カナさんのフルートと李睿真さんのピアノ伴奏で、コンサートをしていただきました。

9月1日、元気教会プロジェクトの2日目。午前中の礼拝で、大野先生より、「大丈夫、神様が一緒だから」という題で、これまでの信仰の歩みを奨励していただきました。午後から、金先生による、絵のワークショップがありました。2人一組になって、お互いの似顔絵を描き、金先生に、描き方を教えていただきました。



大野寿子先生



李睿真さん、平井カナさん



金斗鉦先生

2019年度 教会の歩みと予定

- 4月 イースター
教会定期総会
- 5月 九州教区総会
創立記念日礼拝
ミニバザー
- 6月 ペンテコステ合同礼拝(於 若松浜ノ町教会)
- 7月 地区交換講壇
- 8月 平和聖日
元気教会プロジェクト
- 11月 逝去者記念礼拝
もなかバザー
- 12月 アドヴェント
クリスマス諸行事
- 1月 新年礼拝(会場:若松カトリック教会)
地区信徒研修会
- 2月 信教の自由を守る平和集会
- 3月 地区総会



創立129周年記念礼拝



逝去者記念礼拝

毎月の集会

- ・ 聖書研究祈祷会 (休会中)
- ・ あも～るの会 (第3日曜日礼拝後)
- ・ 生と死を考える会 (休会中)
- ・ 若松キリスト教連合祈祷会(毎月)

編集後記

筒井隆夫

12月4日、中村哲さんが銃撃されたニュースが飛び込んできました。多くの方が、その死を悼み、喪失感が隠せませんでした。困っている人のために寄り添い、すべてを捧げる姿に、感銘を受けていました。その生き様は、これからも、多くの方の道標になることと思います。

MEMO